邪馬台国論
2章　邪馬台国女王卑弥呼

絶対認識を曲げず

古田氏博多説批判

古田武彦氏は著書『邪馬台国はなかった』で衝撃的にデビーして以来常に古代史研究をリードしてきた偉大な先達である。『魏志倭人伝』紹興本には「邪馬台國」という国名は現れない。全て「邪馬壹國」である。原文を読み手の都合で勝手に修正してはならない。これが古田氏が掲げた研究姿勢であった。

氏の研究姿勢は普通の人々に熱狂的に支持された。当時の古代史学会は東大閥と京大閥に分かれ、それぞれが畿内説、九州説を展開し、閥の影響下で邪馬台国を研究するという非学問的な研究姿勢が支配的だったからである。古田氏は東大閥、京大閥のいずれにも属さず、自由で、自立した研究姿勢を貫いた。その核心が「原文に忠実」ということであった。

『魏志倭人伝』における邪馬台国行路記事は簡素で、修飾のない素朴な記述である。「南」と書かれた方角を学閥の意見にしたがって「東」に変更するなどの解釈は許されるものではない。「南」は「南」と捉えるところから研究は出発すべきである。古田氏の主張がいかに的を射たものであったか、察していただけよう。

私たちも古田氏の掲げた研究理念を受け継いでいこう。その上で、古田氏の邪馬台国研究の妥当性を検証していきたい。

古田説・伊都國

古田氏の「伊都國」比定は、直木氏と少し異なるが、前原市である。果たして、前原市が『魏志倭人伝』「伊都國」なのか。

『魏志倭人伝』は「又渡一海千餘里至末盧國」「東南陸行五百里到伊都國」と書いている。「東南陸行」の起点は「末盧國」である。「伊都國は末盧國から東南の方向に陸路五百里」。このように読む。これ以外の読みはない。では、古田氏が比定した「伊都國(前原市)」は「末盧國(唐津)」の「東南」なのか。

九州地図を見るまでもない。誰でも分かるように唐津から見て前原市は「東北」である。壱岐から見れば前原市は「東南」と言えるが、使者はまず末盧國(唐津)に到着し、そこから伊都國に進んだのである。

残念ながら、古田氏の伊都國比定は原文「東南」に忠実であるとは言えない。邪馬壹國旅程探求の第一歩である「伊都國」比定が原文修正の上に行われているのでは、古田氏は、その後の旅程をいかに探求しようとも、『魏志倭人伝』の邪馬壹國に行き着くことはない。

『魏志倭人伝』伊都國は佐賀市

念のため伊都國についての説明を再掲しよう。

東南に陸行五百里伊都國に到る。官は爾支と云う。副は泄謨觚柄渠觚と云う。千餘戸有り。世(世々)王有り。皆女王國に統属す。郡使が往來し、常に駐まる。

文意に紛れはない。『倭人伝』の伊都國は末盧國の東南である。東南は絶対認識である。当時も、現在も、この方角認識に変わりはない。この絶対認識は変更してはならない。末盧國は唐津である。伊都國は唐津の東南に存在したのである。

「東南陸路」とは単なる方角指示ではない。唐津から伊都國に延びる「東南陸路」の存在を前提にした方向指示である。郡使は道なき荒野を歩んだのではない。唐津から伊都國への道が東南に延びていた。郡使はその名のある道を歩んだのである。

南と北をまちがったのだという解釈がある。しかし、南と北をまちがえることはあり得ない。太陽がその方角を示す。帯方郡に住む人も九州に住む人も、南と北をまちがえることはない。また、郡使一行は一人で来たのではない。そして、また、たった一度きりの訪問だったのでもない。数十人の人が度々訪問しているのである。その彼らが南と北をまちがえたことはありえない。また、『倭人伝』の作者陳寿が方角を聞き間違えたということも考えられない。　彼らは唐津から東南の道を進んだのである。郡使が歩んだ東南の道はむろん現存する。国道203号線である。

『倭人伝』の「里」に関しては、「倭韓の里は古周尺の尺度で一里＝100メートルである」という研究が立命館大学教授、藤田元春氏によってなされている。氏の説のように、『倭人伝』距離は、韓国と日本で共通しなければならない。氏の研究のおかげで陸路は、ほぼ正確に計測できる。

伊都國と奴國間の距離は「百里」と書いている。西安、秦始皇帝の陵の近くで発掘された「兵馬俑」の軍人は整然と並んでいる。このように行軍の際一歩の長さは決まっていたと思われる。

その一歩の歩幅をほぼ33cmとして300歩で99m、これを一里（100m）として計測する。恐らく、このようにして『魏志倭人伝』旅程の道のりは計測されたと思われる。郡使は「末盧」～「伊都國」を踏破して、その道のりをほぼ正確に記録することができた。唐津から東南の203号線を500里（50km）進んでみよう。

行き着く伊都國とは佐賀市である。

古田説・奴國

古田氏は「奴國」を傍國として、行路から削除し、「伊都國」－「不弥國」－「邪馬壹國」を本線としている。確かに『倭人伝』には「傍國」について記している。

> 南、邪馬壹國に至る。女王の都する所、水行十日陸行一月。官に伊支馬有り、次を彌馬升いい、次を彌馬獲支といい、次を奴佳鞮という。七萬余戸ばかり。女王國より以北はその戸数･道里は得て略載すべきも、その余の傍國は遠絶にして得て詳かにすべからず。

傍國は遠く離れていて詳細は書くことは出来ないと書いている。傍國については詳細は書くことができないと断っているのである。では、奴國について、詳細は書かれていないのであろうか。そうではない。方角、距離、人口、官の名前まで記載している。

> 東南奴國に至る百里。官をシ馬觚といい、副を卑奴母離と日う。二萬余戸有り。

奴國の記事は伊都國、不弥國、投馬國の記事と比べて遜色ない。記事内容を考えれば、奴國が傍國であるとはいえないであろう。

古田氏が奴國は傍國であると結論したのは、記事内容からではない。氏はその理由を行程表記の文中に見いだしている。奴國への旅程表記は「東南至奴國百里」である。これは「伊都國から東南に奴國に至る。百里」と読む。この行程表記は他と比べて異質である。ここには「東行」、「陸行」などのような「行」という「進行」の動詞がない。不弥國への行程表記には「東行至不弥國百里」には「東行」とあるではないか。「陸行」「東行」のように、「行」の文字があれば実際に行ったのだ。つまり本線である。「行」がないということは、郡使は奴國に実際には行かなかったのだ。奴國は紹介しただけの「傍國」なのだ。これが古田氏の解釈である。

普通なら見逃しそうな一字に着目して考察を重ねる氏の研究方法の面目躍如といえる。

では、「行」という動詞があるかないかを本線か傍線かの判断材料とするのは正しいといえるか。邪馬壹國について『魏志倭人伝』は、「南至邪馬壹國」と書いているだけである。この表記には「行」という動詞は入っていない。では、「南至」は傍線行路なのか。むろん、「南至」と表記しても、郡使は邪馬壹國に実際に行ったのである。

『倭人伝』旅程の表記形式

「陸行」「東行」「水行」などの「進行」を表す動詞があるか、ないかが、実際に行ったか、行かなかったかを決めるという氏の研究が妥当かどうか、『倭人伝』行路の表記形式から考察してみよう。

『倭人伝』の行路は伊都國から投馬國までは論理的である。

> 又渡一海千餘里至末盧國
> 東南陸行五百里到伊都國
> 東南至奴國百里
> 東行至不弥國百里
> 南至投馬國水行二十日

伊都國は「東南陸行五百里」と書かれている。始点表示はないが、始点は末盧國しかない。終点は伊都國。始点末盧國から終点伊都國へは「東南陸路を五百里」である。これ以外の解釈はない。始点と終点をこのように理解する。このルール理解が倭人伝行路解釈の根本である。次の奴國の位置表示は「東南至奴國百里」である。始点は伊都国、終点は奴國である。始点伊都国から終点奴國へは「東南へ百里」である。

不弥國は「東行不弥國に至る百里」である。始点は奴國、終点は不弥國。奴國から「東に百里」で不弥國に至る。「東」とは当然奴國の「東」である。

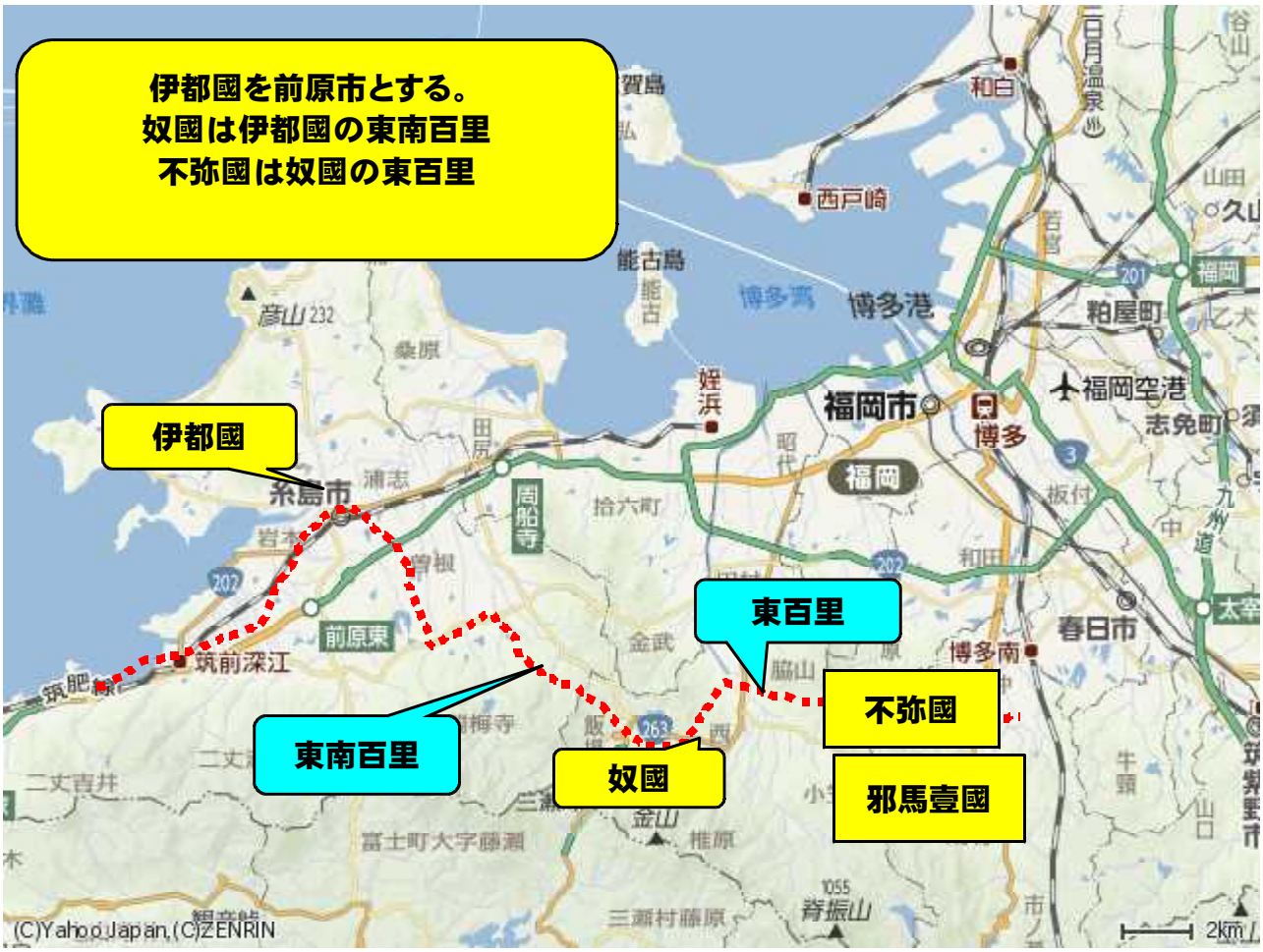
投馬國は始点が不弥國である。不弥國から南に船で20日航海して投馬國に到着する。

末盧國を始点に東南、五百里行けば終点伊都國に到る。
伊都國を始点に東南、百里で終点奴國に至る。
奴國を始点に東、百里行けば終点不弥國に至る。
不弥國を始点に南、水行二十日で終点投馬國に至る。

このように読む。それぞれ始点は隠されているが、書くに及ばないからである。始点と終点がセットである。そして、一つの終点は次の行程の始点となる。これが表記形式、表記ルールである。これらの行路表記において、奴國への行程表記には、「行」という動詞がない。だからといって、奴國は本線ではなく、傍線だと解釈するのは始点と終点をセットで表すという表記ルールを無視した解釈である。

奴國はなぜ傍國となったのか

別の視点から古田氏の「奴國傍國」説を考えてみよう。『倭人伝』行路を考察する際、誰でも日本地図を手元に置く。私たちも九州地図を手元に置いてみよう。そして、古田氏のように伊都國を前原市に比定する。その上で、「東南百里の奴國」を現代地図で探してみよう。



前原市から東南に百里(10km)・・・地図上に適当な東南路はないが、あえて、東南方向に進んでみよう。すると、奴國は雷山の東、三瀬峠あたりとなる。ここは山の中である。ここが二万戸を誇る奴國となる。これは困った。人が住まないこんな山中に奴國が存在したはずがない。「奴國は本線と関係ない国である。傍國だ」と古田氏は判断せざるをえなかったと思われる。これが「傍國奴國」説の裏側、つまり真実であろう。

伊都国前原市比定に基づけば、「東南百里」の奴國は山中となる。不弥國は「東行至不弥國百里」である。奴國の東の不弥國もまた山の中である。最終目的地の邪馬壹國はどうか。邪馬壹國について古田氏は不弥國の南と読んでいる。読みとしては正しい。そうすると、邪馬壹國もまた山の中となる。なるほど、邪馬壹國の「邪馬」は日本語の「山」に通じるかもしれない。だがいかに「山」の國であったとしても、この山中はないであろう。

其の國、本また男子を以て王となし、住まること七、八十年。倭國亂れ、相攻伐すること暦年、乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑彌呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿なく、男弟有り。佐けて國を治む。王となりしより以來、見るある者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。唯男子一人あり。飲食を給し、辭を傳え居処に出入りす。宮室・楼観・城柵、嚴かに設け、常に人有り、兵を持して守衛す。

侍女が千人もいたという王城である。楼観・城柵が厳しく設けられていた王城である。この山中に、女王卑弥呼の王城があったと想定するわけにはいかない。

前原市を伊都國と比定すると、奴國、不弥國は全て山中となる。そして、「南邪馬壹國」と書かれた邪馬壹國を不弥國の南に存在すると読むと、邪馬壹國もまた山中となる。これはどう考えてもおかしい。古田氏が「伊都國の東南の奴國」を放棄したのはやむを得なかったと思われる。伊都國から東南に進む訳にはいかなかったのである。そして、奴國を傍国扱いにして、「東南至奴國百里」をすべて削除してしまった。

・・・・行路上に奴國は存在しないのだ。伊都國から次に進む國は不弥國だ。不弥國は伊都國の東だ。前原市の東に不弥國が存在すれば、そこは博多だ。

古田氏は伊都國前原市を是として、次の奴國を削除して、いきなり、不弥國へと進んだ。結果、古田氏は博多に行き着いた。

東側の那珂川・御笠川流域だ。北は博多駅から南は太宰府まで。「弥生銀座」ともいわれる、わが日本最大の弥生期最密集出土地域。弥生のゴールデン・ベルト地帯である。ここだ。

（新泉社　「日本古代新史・卑弥呼の女王国は九州にあった」）

しかし、そこは『魏志倭人伝』の邪馬壹國ではない。博多に邪馬壹國はなかったのである。

伊都國前原市比定が全てのまちがいの根本

伊都國を前原市に比定する研究者は多い。「伊都國は前原市でまずまちがいなし」と、ほとんどの研究者が確信している。しかし、これらの比定者は奴國の扱いに困惑する。「東南百里の奴國」は山中となる。こんな山中に奴國があったはずはない。戸数二万余の大国がここであるはずがない。しかし、奴國の行路は「伊都國の東南百里」となっている。一方を立てれば他方は立たず、他方を立てれば一方は立たず。行路探索は文字通り足が地につかず、空中を飛び、それぞれがかってに思い描く『倭人伝』旅程となってしまっている。

こうして、邪馬壹國は全国に分散してしまい、到底あり得ない奈良・邪馬台國説が未だに信じられている現状である。これら全ての誤謬の元凶は、「東南陸行五百里至伊都國」を素直に読まなかったことにある。ここを「東南」とその記述通りに読めば、百人が百人全て、「伊都國は佐賀」とするであろう。

『魏志倭人伝』 奴國は大川市

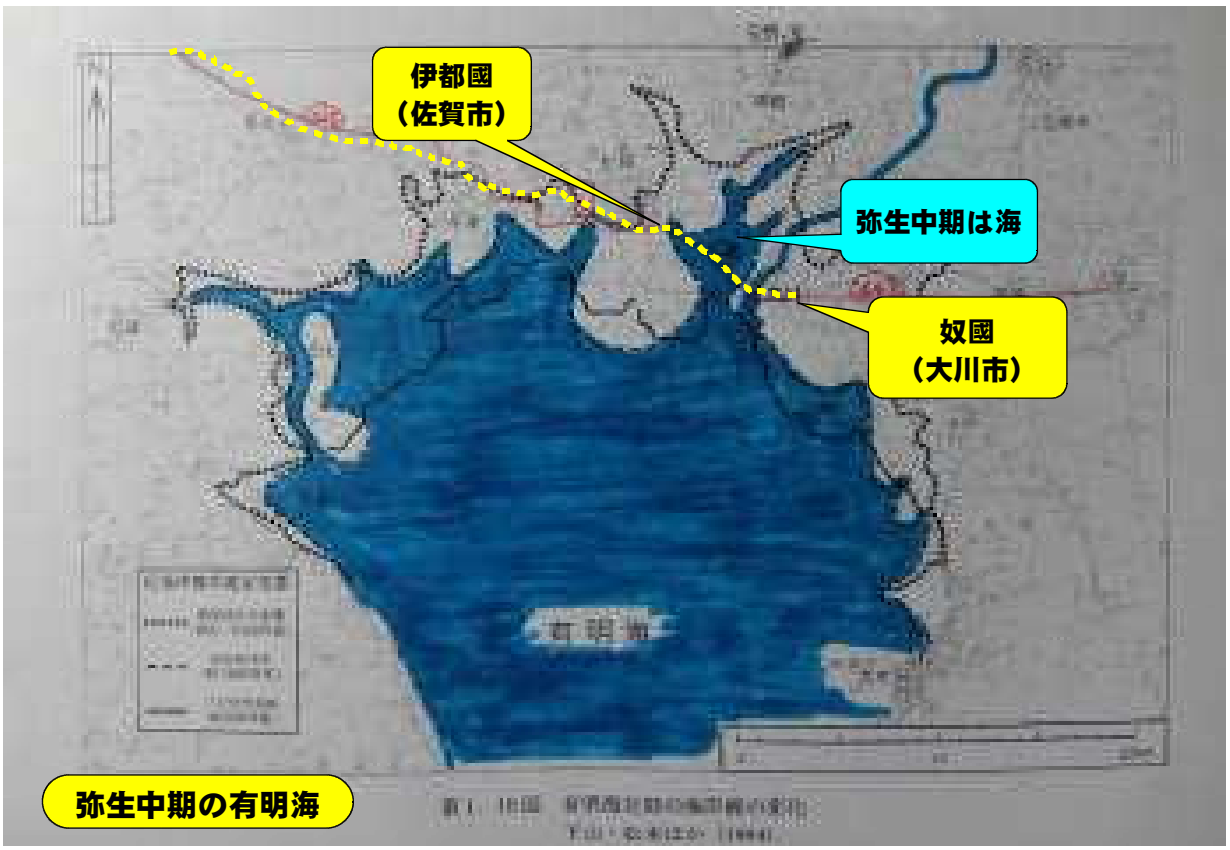
唐津を始点として『倭人伝』の記述通りに、東南に進むと佐賀市に着く。ここが伊都國である。次は奴國である。

始点佐賀市から東南百里（10km）進んでみよう。奴國とは大川市である。

だが、ここに一つ問題が存在した。『魏志倭人伝』は弥生中期の書物である。弥生中期、有明海の海岸線はどうなっていたのか。もし、有明海が現在よりずっと北上していたなら、大川市は海の下である。

すでに引用したが、弥生中期の有明海海岸線を研究した報告があった。その報告を再び引用させていただく。

弥生中期有明海の海岸線は以下の図のようであった。奴國である大川市は陸であった。海だったのは佐賀市から大川市に至る道である。ここは海だった。従って『倭人伝』は伊都國から奴國への道程を「東南百里」とのみ書いたのである。「陸行」「東行」のように「行」という動詞を行路表記に入れなかったのは、古田氏が考察したような傍國だったからではなく、この行路が海の道だったからである。後代、有明海の海岸線が南下して、東南の海の道は陸の道となった。それが208号線である。208号線は今も、佐賀市と大川市を結ぶ要路である。


伊都國
（佐賀市）
弥生中期は海
奴國
（大川市）
有明海
弥生中期の有明海

東南百里は海の道
伊都國
弥生時代は海の道だった
奴國
佐賀市役所
佐賀駅
巨勢川
佐賀江川
リ・ウッド工場
道海島小
南佐賀
佐賀市
川副町大字福富
農業大学校
諸富署
諸富町大字為重
八田江川
早津江病院
川副町大字早津江
佐賀県
神埼市
白浜産業
1km
(C)Yahoo Japan,(C)ZENRIN

古田説・不弥國

古田氏の比定では、博多湾の入り口が不弥國、その南が邪馬壹國である。では、この比定の場合、不弥國から投馬國へ無事航海することができるのであろうか。投馬國への行路、「南水行二十日」をどう解釈すべきか。現代地図では博多の南は陸地である。弥生中期、博多付近は海だったとしても、博多の南は陸地である。ここから南に抜ける水路はない。博多には「南港」がないのである。不弥國を博多付近に比定すると「南水行二十日」が成立しない。

「南水行」とは「南への水路の船旅で投馬國に行く」と読まなければならない。ここで、もし、投馬國行路は博多湾から北西に進み、佐世保沖を通過し、鹿児島へ南下する航路だとするならば、残念ながら、その航路は、「南水行二十日」ではない。不弥國博多説は成立しないのである。

『倭人伝』 不弥國は筑後市

伊都國－奴國－不弥國が本線である。邪馬壹國への行路上必要不可欠、行路上必然の國が伊都國、奴國、不弥國である。

伊都國は佐賀市、奴國は大川市である。奴國の次は不弥國である。奴國も不弥國も邪馬壹國への行路上、必然の國だった。必ずこの國を通らなければならない國として存在した。この意味は現代地図を参照すれば一層はっきりする。奴國（大川町）で道は分岐する。道は東南の道と東の道に分かれる。ここまで東南の道を下ってきた郡使はここで方向を変えなければならない。奴國で分岐する二つの道のうち、東へ延びる道を選択しなければ、邪馬壹國に行き着くことができなかったのである。

大川市からまっすぐ東に道が延びている。この道が不弥國への道である。くどいようであるが、もし、伊都國と邪馬壹國が一本の道で繋がれて、途中、進路変更しなくてもよいのであれば、奴國も不弥國も記載する必要はなかった。だが、現実はそうでなかった。奴國と不弥國で進路を変えなければならなかった。故に、奴國、不弥國の記載は絶対だったのである。

さて、奴國(大川市)から東に百里(10km)行けば不弥國である。不弥國は筑後市である。

『魏志倭人伝』 投馬國

投馬國は不弥國(筑後市)から「南・水行・二十日」のところに存在する。

投馬國は薩摩に比定されることが多い。「ツマ」と「サツマ」がよく似ているからである。だが、薩摩は投馬國ではない。筑後市から鹿児島まで20日も要しない。しかし、名前の一部を共有していることから考えると、投馬國と薩摩の間には何かの交流、関係があったのであろう。

不弥國から投馬國へ向った

投馬國へ向かう『倭人伝』行路は他の國への行路と根本が異なる。「末盧」－「伊都國」－「奴國」－「不弥國」は九州本土の行路である。伊都國・奴國・不弥國は内陸部の国である。ところが、不弥國から投馬國へは「水行」である。「水行」とはむろん、船である。だが、不弥國は筑後市で、筑後市は海に面していない。筑後市から「水行」とは不可解である。ここは理解に苦しむ所である。

現代地図で考えてみよう。筑後市の南に海はない。だが、不弥國(筑後市)から「水行二十日」で投馬國へ到着したという。

不弥國の港

確かに、筑後市は、現在、南に海が開けているわけではない。だが、ここには矢部川がある。矢部川を下れば有明海に出ることができる。有明海を南下すれば東シナ海の出ることができる。この旅程が「水行」である。ここに「水行」と限定したのは、この旅程には「陸路」がない故である。

投馬國へは、筑後市から矢部川、有明海、東シナ海を南下、20日航海したところに存在した國である。20日の船旅を終えて到着した國、投馬國とは沖縄那覇市である。

投馬國への始点は不弥國である。不弥國から「南に水行二十日」で投馬國に到着する。表記そのものに問

題はない。だが、不弥國の次に投馬國が紹介されたため、大きな混乱を生む原因となった。

投馬國は那覇である。那覇は「傍國」ではないが、投馬國の次に邪馬壹國が存在したのではない。投馬國は記載が必然とはいえない國である。特に記載する必要はなかった。むしろ、この國について書かない方が旅程としてはよかった。この投馬國が一つ入ったために、要らぬ混乱を引き起こした。投馬國のみならず、奴國も傍國ではないかというような疑惑を生じさせ、あるいは、投馬國の次に邪馬壹國が存在するといった誤認を生じさせた。

投馬國を旅程に入れないで 「不弥国南至邪馬壹国女王所都」と紹介すれば良かったのである。

しかし、何故、『倭人伝』は投馬國記事を挿入したのか。理由は投馬國が女王国の連合国のひとつで、不弥国の港から投馬国に向かったからである。

『魏志倭人伝』 邪馬壹國

邪馬壹國への行程は「南至邪馬壹國」と書いているだけである。この行程表記には、それまでの行程表記と較べて、不明瞭な点がある。

この部分だけを取り上げてみれば不明瞭である。そして、不明瞭なこの部分だけをいろいろに解釈することによって、邪馬壹國の位置をそれぞれに比定する結果となっている。

しかし、不十分な表記であっても邪馬壹國の位置がぶれることはない。伊都國・奴國・不弥國・投馬國が特定できれば、邪馬壹國の「南至邪馬壹國」の解釈がまぎれることはない。

邪馬壹國は筑後市の南である。那覇の南ではない。女王国への旅程には「行」の文字はない。従って、筑後市から女王国へは船を使ったのである。

卑弥呼の国はどこにあったのか。筑後市から「南・1300里」である。博多ではない。奈良でもない。

詳しくは、次章を参照していただければ幸甚である。